

シンガポールを旅して

藁 内 捷 之

はじめに

わたくしは、シンガポール共和国へ庭園・緑地の研究のため1980年7月末1週間にわたり視察旅行をした。

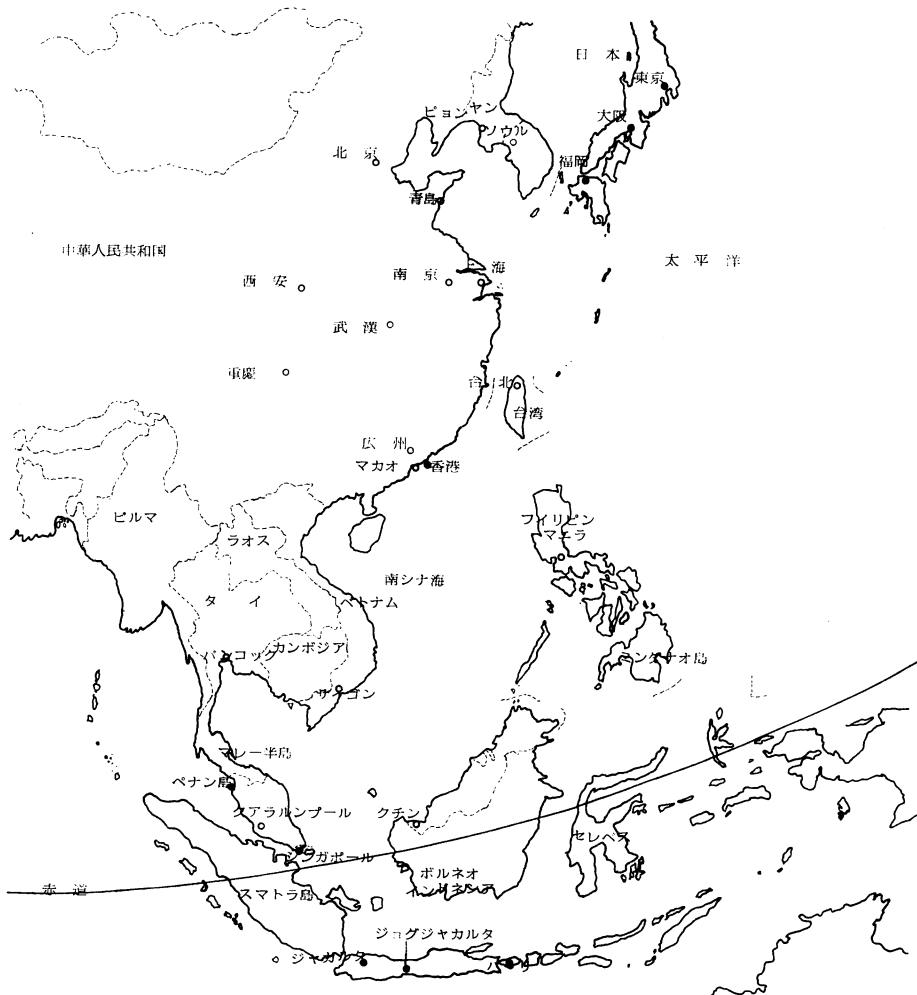
シンガポールは、いわゆる「庭園都市（ガーデンシティ）」として、世界的にも有名であり、ロンドン、ウィーンと共に世界の三大緑化都市に含まれている。熱帯のこの地に研修地を選んだ理由は、①日本から比較的近く、②都市緑地の文化は日本より進み、③東洋文化と西洋文化の融合が顕著に見られ、④シンガポールの国花、ランの栽培技術や観葉植物、ランの原産地を見聞することに

より、日本の都市緑化や栽培装飾技術の改善をはかることができるかと判断したためである。

この政府の行う緑化事業に加え、1967（昭和42）年以来、市民に対してのPR活動として Clean and Green キャンペーンを行っている。このうち、Clean は清潔な街づくりを意味する。

また、Green に関しては、現存する樹木・緑地の保存、民間、公共を問わず新規開発に伴う植栽義務、学校、事務所、ガソリンスタンドなどの緑化コンテスト、「植樹の日」の植樹、生垣に対する一部免税などがある。

アジア南部 — シンガポールの位置 —



ここで(シンガポール共和国 (Republic of Singapore)) を簡単に紹介すると、赤道の北 137 km (北緯1°) に位置し、本島の長さは 41.8 km、幅 22.5 km (面積 581 km²、淡路島とはほぼ同じ) であり、その南部に面積 97.4 km² のシンガポール市がある。気温は年間平均 26°~28°C、雨量は約 2300 mm、湿度は 60~70% とやや乾燥している。人口は 233 万人 (1976 年現在) で内訳は、中国人 76%、マレー人 15%、インド・パキスタン人 8% となっている。

この研修場所は、クイーンエリザベスウォーク、マーライオン広場、マウントフェーバー、植物園、マンダイオーキッドガーデン、ジュロンバードパーク、日本庭園、中国庭園、市街地などである。

今回の研究主題を、①都市の広場について、②街路樹と都市緑化について、の 2 点にまとめ、ここに報告する。

なお、この海外研修は多木文化基金の援助により実現し、有意義な研修となった。ここに御厄介になった皆様深く感謝するものである。

何分、短時日のうちにまとめたので、不備な点も多いと思われるので、他日に改訂したいと考えている。

1. 都市の広場について

シンガポール国内で、歩行者道路ぞいの憩広場 (レストコーナー) であるクイーン=エリザベス=ウォークや自然観賞のマンダイ=オーキッド=ガーデン水景園や山頂公園のマウント=フェーバーなどが広場の代表例であろう。それぞれについて紹介したい。

(1) クイーン=エリザベス=ウォーク

シンガポール港を見渡す海沿いの散歩道で、幅員 4 m 位である。地面は、矩形の赤茶・黄土・灰色の三色で模様舗装がされており、美観と一定方向の誘導の役目を果たしている。ヤシの並木の下に赤いベンチと赤白の金属フェンスと、色彩豊かな構造物が続く。明るいベンチが、このように、並列していることは、見た目にも「憩いの広場」という雰囲気をかもし出している。

散歩道の内陸側には、大木が緑陰樹として木陰を落としている。大きな木の根元は太い幹回りであるが、根締め (この地では一種の寄植え花壇) の植物を有している。熱帯照葉樹の樹形は、一般に傘状のためであろうか、根元に寄植え花壇を造って、安定感が良くなっている。その周囲にベンチがあり、数人の人がそこに腰掛けて、くつろぐ姿が見られる。過去からあった巨大木を伐採せずに保存し、緑地系統の中で、公園樹木として活用している。その計画立った措置に感嘆した。

また、この通りのアンダーソン橋まで来ると、突出た対岸に「マーライオン像」の広場がある。それを見るのに、この地点が最適の視界に入っている。この像は本市のランドマークになっていて、上半身がライオン、下半身が魚の像で、口から水をはき、夜は照明にいろどられ

る。道行く人もこのビューポイント (よく見える地点) で立止まる。

この広場の特徴は、歩いて単調にならないように舗装表面を、色彩・材料共に変化させていること、海から内陸部に入るにしたがって緑陰の濃い植栽がなされ、その奥のベンチで休息している人が根元の寄植え花壇を囲んでいること、ヤシ類の並木、ベンチ、フェンス、照明具などは実用的よりも美観を重んじていること、彫像 (マーライオン像) という焦点の前の広場では多くの人が集まることなどと考えられる。

(2) マンダイ=オーキッド=ガーデン

この蘭 (ラン) 園は、市街地から車で約 1 時間、ジョホールバルへ向かう途中、ブキテマ高原の北側に、4 ヘクタールの広大な面積を占める。ここに、露地で数千種の蘭花が栽培され、蘭がこの国の国花であり、ここからこの花が外国へも輸出されている。

園内の低地、入口付近に水景園がある。ここには全世界から集められた熱帯植物があり、植物的な興味も関心の的となるであろう。景観的には法面と遣水と池という地形から概観しよう。

上段から下へ降りる場合、レンガ階段を用い、実にうまく点景のつなぎを入れている。すなわち、レンガ階段に沿って遊歩すると、その斜面曲線の両側に植込み目隠しが、次の景観の絞りとなっている。レンガ敷きの園路に沿って花壇風に飾られているのには感心した。

自然風景式に小川に沿って熱帯の芝草であるパダン (マレー語で草の意味) が敷き詰められ、草原の周りに観葉植物と中高木がうまく視界を遮らないように配植されている。

熱帯のこの地へは、イギリスの田園風景を導入しているように思える。一般に、シンガポールの広場は、ゆるい起伏のパダンの広がり大きな木が点在し、白い壁と赤いレンガ屋根の建物があるといった風景が見られる。

したがって、この水景園では、整形式の固苦しさがなく、ゆったりと歩くにつれて移り変わる間に、シペラス、水蓮などの水生植物に出会いながら、やがて、池を過ぎ、簡素なあずまやにたどりつく。

巧みに空間を構成して、地形の隆起や植込みのバランスによって、あきずに風景が変わるのを楽しめる。小川と園路、それに、レンガ階段と木橋は、ある時は風景の飾りになり、またある時は利用施設となり、役目の交代を思わせる。その中で、色彩に富んだ観葉植物の寄植え群が目まぶしくさせる。例えば、アルピニア、赤色のコルディリーネ、斑入りのジンジャーなど色とりどりの植栽である。

道沿いの連続に境栽花壇が、熱帯花木と観葉植物を利用することによって、全体として一貫性を持っている。

四方面という言葉があるように、いずれの方向から見ても様になっている。広く、明るく、ゆるやかな草の上を歩き、明暗と色彩のリズムを感じるのは爽快である。

外周は高木林立により閉鎖され、凹んだ空間に造園的なデザインを自然植物に施しているようだ。

(3) マウント=フェーバー

シンガポール中央最南端にこの丘がある。この丘からの眺めは素晴らしい。市街地と港の両方が見渡せる。市内では数少ないこの丘陵地の頂上は標高 115 m である。ここからセントサ島へ、海上 60m をケーブルカーが渡り、高層ビルが林立している姿を見ることができる。

この白い近代的なビルの 4～5 階位まで樹林でおおわれている。まるで、公園の中に建築が浮かんでいるように見下ろせる。山腹から頂上にかけて、地面に対して塀や建物などの傾斜した景観がある。上の広場には、ベニヒモノキ、インドソケイ、ブーゲンビリア、パンダナス=ベーチーなどが植わっている。売店、展望台などに大勢の人が美しい眺めを求めて集まる。

この山頂も市民にとって憩いの広場となっている。

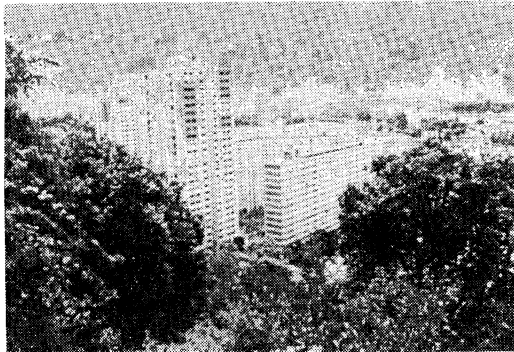


写真1 マウントフェーバー山頂よりの展望

2. 街路樹と都市緑化について

(1) 都市の中の街路樹

シンガポール市街地は、相当多くのオープンスペース(緑地)を残し、建築が飽和状態になっている訳ではない。街路樹が、路傍植栽というのにふさわしく、この市内に残った緑地と緑地を結ぶように、街路樹がすべての道路に渡って伸びている。

市道の中で最も美しいとされるオーチャードロードからウッドロードの緑道を歩く。ここで良く見かける樹木の一つにアンサナノキ (*Pterocarpus indicus*, 原産地はマレーシア, 樹高 25~30m, 生長が非常に早く, 早期の緑陰形成に有効, 黄色の小さな花を沢山つけるが目立たない)がある。この街路樹は、樹形が円蓋(傘)状をなし、路面上におおいかぶさるように列植されている。

そこで、次のようなことを見出す。

- ① 地下ケーブルがあるため、樹木が亭々とそびえている。剪定の跡が見えないのも、台風と地震がこの地方にないためだろうか。
- ② 専用の遊歩道である緑道は、縁取りが普通植床を兼ねている。一直線ではなく、屈曲、凸凹の区画が見られ、かえって自然風に見える。
- ③ 街路樹の多様性が見出せる。高木だけでなく、低木、草花、花木、観葉植物、芝草(バダン)とあらゆる種類が平面的のみならず、立体的にも質量共に優れている。
- ④ 建物と建物の間に多くの緑地が残っている。例えば、アンサナノキ、アメノキ、ホウオウジュ(火炎樹)、など高木が疎植されており、人間に良き木陰を与えている。

また、街路や車道を通っているといろいろなことが目につく。緑道の舗装には色彩の美しい対比があり、鮮やかな模様がレンガ張りを中心に続いているので、歩いても退屈しない。ベンチも街灯も歩道に並び道路景観を作っている。住宅地を考えると、車道と緑道の間に路傍植栽(街路樹など)があり、8 mばかり緑道の内側に生垣・植込・庭木などの屋敷内緑地があり、建物に到る。したがって、ここから車道まで広い間隔を各種植物に遮られている。法面では道路沿いに、手前を低い植栽、遠方を高い樹栽にし、見た目にも明るく、すっきりした景観を構成している。また、車で走っていると、法面の中央分離帯(グリーンベルト)の芝生の中で、低木類が明らかに曲線的にデザインされて寄植えされているのが分かり興味深かった。

(2) 植樹とエアレーション(AERATION)

街路樹の植栽間隔は 8~10m であり、下木(低木)は約 5m 間隔で植える。市内の緑の量は樹木が大きく数が多いために目立つ訳ではない。路傍植栽に低木が密植されている。



写真2 ネピアロード緑道でのエアレーションの例

低木や草花がある程度大きくなると、将来徒長して来るので、引き抜いてしまう。剪定や手入れが間に合わないためである。ちょうど、花壇草花をわが国で季節に応じて植え替えるように、当地では適宜小さな苗を植えるのであろう。

街路樹の条件は、生長が早く、樹形が円蓋(傘)状で、多量の葉を有することである。これにより早く緑陰を作られる。

エアレーション(AERATION)は街路、歩道、広場に植栽され樹木に対し、適当な空気と水分を供給する方策である。このプロジェクトは1975年から緑の保全事業の一つとして推進されて来た。市街地の舗装面が増え、樹木の良好な生育な望めなくなったためである。熱帯多雨林の植物では、十分な水分と根系の伸びる余地とが必要である。浅根性のものが多く、一層、根元を舗装する影響が大きい。

オーチャードロードから植物園へ向かうネピアロードの緑道でエアレーションの実例を観察した。車道と宅地にはさまれた緑道に沿って側溝と植樹帯が走る。樹木の根元には、エアレーションスラブを敷き、その目地には芝草を植える。根への水の供給は、道路側溝で集めた雨水の一部を集水柵からコンクリートパイプで植栽地へ導入する。

街路樹では、植栽スペースを最小 $4.0m^2$ (普通 $2.0m \times 2.0m$)はとり、下木(低木)の植栽は行わない。

3. 考 察

(1) 都市の広場について

(ア) 広場では自然美だけでなく、ベンチ、フェンス、階段、模様舗装などは人工空間を構成している。造形美を演出する工夫が参考となった。

(イ) 大木が枝葉を連ねると、その木陰に人は憩い、談笑し、周りの風景を眺めることができる。このように、古くからある木を大切に自然観をはぐくむ教育が必要である。

(ウ) 広場の周りには、親しみやすい花木、観葉植物、高木、低木を植え、観賞木となっている。われわれも郷土植物を自然風に導入した緑地が四季の変化を美しく伝えるよう研究せねばならない。

(エ) 園路に沿って歩くにつれて風景が変わる花壇風植込みは、いわば四方面で、いずれの方からも観賞できる。この手法については、今後、研究により、質的にきめこまかな植栽計画を図ることができよう。

(オ) この国がかってイギリスの植民地であったため、広場に自然風景式の伝統が認められる。田園風景の表現を通じて、熱帯植物(材料)と主題(理念)の融合、すなわち、東西文化の交流を発見できる。

(2) 街路樹と都市緑化について

(ア) 街路樹は、無剪定方式、花木や観葉植物のような多様な植栽導入、架線の地下埋設、緑道の併用など、緑豊かな環境風土を物語っている。地域における緑化は、点から線、面へ緑を増やすことの大切さが認識された。

(イ) 緑道の縁取りはまがりくねり、自然風に見える。われわれは、街路樹や緑道といえば、植床も幅が狭いため、直線に列植を想像しがちである。しかし、それについては、今後質的な発展を考えねばならない。

(ウ) 法面では道路沿いに多様な植物デザインがなされている。群植が色彩にあふれ美しく続く。植物の美しさが十分発揮できるような研究を続けたい。

(エ) 市街地に舗装面が増すほど、街路樹の植床にますます根系の環境悪化をきたす。街路樹だけでなく舗装植栽には、透水性の平板すなわちエアレーションスラブを敷き、根へ水と空気を供給している。このような生き物としての植物サイドに立った都市構造がわが国でもますます重視されよう。

(1981年3月25日記)